批評と紹介

ゴンダ『インドネシアにおける梵語』

辻　直四郎

J. Gonda : Sanskrit in Indonesia. Sarasvati Vihara Series vol. 28, Nagpur (Intern. Academy of Indian Culture), 1952. XI, 456 pp.

インド文化と接觸し、インドの宗教の感化を受けた地域の言語で、梵語の影響を免れたものは殆んどない。インド以北の諸地、中亞・西藏・中國・日本は、主として佛教の傳播に伴い、インド・シナ半島の諸國及び南海の諸島は、ヒンドゥー教並びに佛教を通じて、多くの單語を移入した。殊に南海地方においては、インドの文物一般により、長期にわたつて影響された結果、マレイ語・ジャワ語中の梵語の要素は、日常語にまで滲透し、その數量もまたおびただしい。しかし借用語の研究は、貸借關係にある兩言語に精通することを必要とし、兩者が全く異る語族に屬し、且つ一方が多數の言語乃至方言に分岐している本研究の如き場合には、その人を得るに甚だ困難である。著者ゴンダ博士は、現にオランダ・ユトレヒト大學のサンスクリット語及びインドネシア語學の教授であり、ヘンリック・ケルン以來、この方面において、花々しい成果を世界に誇るオランダ學界の傳統を擔う點から見ても、これ以上の適任者を他に求めることはできない。教授は從來かつて見ない規模・詳細・正確を兼ね備えた大著により、「インドネシアにおける梵語」の研究を集大成するに成功した。また本書の各章各節は、これまでの研究文献に詳しく參照し、懸案の諸問題を論議し或いは穩健な解決を提示しているから、學術書として缺けるところがない。借用語の音形・意義の變遷につき、著者はしばしば類例を古今のヨーロッパ語に求めて說明しているから、本書は單に梵語及びインドネシア語の研究者にとつて必讀であるのみならず、外來語研究一般に對して寄與するところが多い。梵語からの借用語に反映する南海の宗教・文學・社會・制度・學術等に言及しているから、ひろく南海文化の研究者に推稱すべき名著である。インドネシア語の專門知識を缺き、細部にわたつて批判する能力のない筆者が、あえて本書を紹介する理由もここにある。しかしその豐富な內容をつぶさに記述することはでき

ないから、以下章を追つて、わずかにその概要の一端を傳え、直接本書を繙く意欲をそそるにとどめる。例としては、梵語學者に解りよく、簡明で代表的なものを選んだ。

略字　B=Balinese, IN=Indonesia(n), J=Javanese, OJ=Old J, M=Malay, S=Sanskrit.

第一章序說 (pp. 1—23) は、まず IN 語の文法的特質を略述し、インド・ヨーロッパ語特にSとの差異を指摘して、本書の對象とする二種の言語の間に、著しい相違のあることを明かにしている。インド人は西紀の始め頃から、東南アジアへ向つて海上貿易を開始し、佛教・ヒンドゥー教を媒介として、文化的にも影響を與え、マレイ半島を基點として IN 諸島へ、更にフィリッピンへと進出した。中部ジャワに興つて強大を誇り（八・九世紀）、九世紀の中葉以後スマトラのシュリーヴィジャヤ帝國（室利佛逝、三佛齊）に君臨して、十一世紀まで南海に覇を唱えたシャイレーンドラ王朝、十三・十四世紀に最盛時を現出したジャワのマジャパヒト王國の文化は、インドの感化を遺憾なく發揮している。この際ヒンドゥー教、小乘佛教、大乘佛教、特にタントラ佛教の演じた文化的役割は極めて大きい。バリ島は今なおヒンドゥー教の傳統を維持している。南海は中國とも交渉をもつたが、中國語の影響は、Sのそれに到底及ばなかつた。十三世紀以後イスラームの傳播に伴い、インドを媒介としつつ、アラビア語・ペルシャ語が移入され、十六世紀以後の植民地競走の結果は、ポルトガル語、スペイン語、英語、殊にオランダ語からの單語を多く導入した。しかしインド以外の言語からの借用は、Sの場合のように、南海の民衆の間に深く根を張つていない。

第二章「インドネシアにおける梵語の普及」(pp. 24—128)。いかにしてSが IN に傳つたかを知る資料としては、S以外のインド語で書かれた少數の碑文のほか、商業・航海・植民に關する東西の書籍、美術遺品、文字、口碑、地名等が擧げられ、更に借用語が重要な示唆を與える。インド人の海外進出に、南印東岸特にカリンガ地方が、主役を果したことは疑いない。この地名に基ずく OJ Keliṅ, Kliṅ（南印全體或いは更に廣い地方）、訶陵（七世紀の中部ジャワ王國名）參照。出航地として南印諸港が最も便利であつたとしても、商業に直接參與しなかつたはずのバラモン、技工、軍事冒險者は、必ずしも南印出身たるを要しない。またインドの西部海岸と東方との交通は常に盛んであつた。それ故、全印の各地方が、インド文化の東漸に寄與したと考えられる。OJ 最古層に屬する作品中に、タミル語・ペルシャ語からの借用語があり、また

OJ 中に北印起原のものと思われる單語が見いだされる。

S の影響を直接に受けた地域は、マラッカ、スマトラの一部、ジャワ、バリ等で、借用語に關しては、M 及び J(B) が二大樞軸をなしている。Mの要素は海上貿易を通じて、古い時代からジャワの諸港へもたらされ、Mの弘通に伴つて、その語彙中のS借用語は遠く且つ廣く他の諸島へ傳わつた。これに對しJの影響は、主として文學によつてであつたが、S借用語の普及に寄與したところが多い。他の諸島は、直接にS乃至インド語を借用した場合もあるが、間接にM或いはJから移入した場合が甚だ多い。セレベス諸語 (Macassar, Buginese, etc.)、バリ以東の諸島の言語、ボルネオ諸語 (Dayak or Dyak languages, esp. Busang)、フィリッピン諸語 (Tagalog, Bisaya, etc.)、スマトラ諸語 (Gayo, Achehnese, Karo Batak, Toba Batak, etc.)、ニヤス島の言語、マダガスカルの言語 (Malagasy) 等につき、著者は豐富な實例を擧げて、いかに IN 全域にS借用語が波及しているかを示している。

一般に單語の貸借に際して見られるあらゆる現象に對し、S對 IN 語の場合も、多くの具體的事例を提供する。借用語の常として、インド起原の同一單語が數種の IN 語に入つた場合、それぞれの地域の社會的・文化的條件に從つて原義から遠ざかり、樣々の方向に意味が推移し、受入れ語の音韻組織或いはその他の影響の下に音形も多岐に變化する。いやしくも借用語の問題に關心をもつ言語學者は、本書の隨所に興味ある例證を見いだすにちがいない。Pkt. bhikku (比丘): OJ wiku 'ascetic, religious man, monk', B wiku 'a learned priest', M biku 'a Buddhist monk of old Malaya'; S bhikṣu : Macassar and Buginese bissu 'a class of male or female priests or magicians' (p. 87). 極めて多義の S dharma (法) は、IN 諸語において專ら慈善行爲に關して用いられる (p. 86)。ただし IN 語に入つたSまたはこれと同系の單語は、必ずしも常に直接に移入されたとは限らず、一旦タミル語を經由した場合があり、直接の出所を決定し難い場合もある。

'doublet' は種々な原因によつて生じた。直接Sに由來する語形とタミル語を經たものとの並存、S形そのままのもの (tatsama) と受入れ語に同化した語形との並存、Sと近代インド語とから兩度にわたつて借用された語形の並存等、一々その事例に乏しくない。

海上の交通・商業による借用と、學問或いは文學を媒介とした借用とは、區別して考えなければならない。後者の傳承には文字が重要な要素となるが、南海においては七六〇年ま

で、いわゆるインドのパッラヴァ文字が碑文に使用され、後のカウィ文字または古代ジャワ文字はこれから發達し、更に近代ジャワ文字に轉化した。その他の IN 諸文字も、大體カウィ文字或いはインドネシア・パッラヴァ文字の系統をひいている。

最古の碑文はボルネオで發見された四祭柱で、Sをもつて書かれ、內容はヒンドゥー教的で、四〇〇年頃のものと推定される。ほぼ同時代の碑文はマレイ半島にも殘り、ジャワ最古のものは、恐らく五世紀に屬する。この頃からSの文典及び文獻が研究されたものらしく、シャイレーンドラ朝諸王の碑文、ジャワ並びにバリ出土の碑文が續き、スマトラの大帝國の首都が學藝の中心をなしたことは、疑いを容れない。碑文にSを使用することは、十三世紀までも跡を絕なかつたが、この頃ともなればSの知識の衰退は、顯著に現われている。ジャワにおけるSの研究は、義淨の記述からも窺えるが、聖典にSを用いた根本說一切有部の隆昌は、IN 語において、パーリ語に由來する借用語の意外に少い事實と合致する。古くジャワで作られた文典 Swaravyañjana は主として音論を扱い、バリで作られた Karakasaṅgraha（格の用法）は、S文典カータントラの影響を示している。その他Sの練習書、辭典、韻律書、バリ島の讚歌類（e. g. Śrī Yajurveda Buddhastuti）、タントラ佛教徒の禮拜用書（Buddhaveda）等があり、その中に多くのS借用語を含んでいる。ヴェーダという語が IN において、全く原義を離れて使用されたのに驚くが、buda ＜S Buddha（佛陀）もイスラーム以前の文化期を指すに用いられる。ただし有名であると同時に誤解の原因となつたバリの四ヴェーダ（caturweda）が、アタルヴァシラス・ウパニシャッドの四節を指すに過ぎないことは、もはや周知の事實である。ジャワの宗教文獻（小部分はSで傳わる）は、シヴァ教系のものと佛教系のもの（特にタントラ佛教、e. g. Sain hyain Kamahāyānikan, 'the divine Mahāyāna-doctrine'）とに區別される。文學書としては Brahmāṇḍa-purāṇa（ヴァーユ・プラーナ及びブラフマーンダ・プラーナの一部に相當）の散文本並びに韻文本（kakawin）があり、マハーバーラタの OJ 散文譯（parwa, ca. 1000 A. D.）は、S文學の研究者にも、借用語の研究者にも重要である。學者・宗教家・官吏は、實際上Sからの單語を必要としたに相違なく、借用語の比率は作品の內容、作者の教養に從つて高低があつたものと解される。

借用語は、古い時代に IN 人が、精神的・物質的に何をインドから學んだかを示す指標である。IN 人が現住諸島へ渡る以前に、いかなる文化をもつていたかの問題（Kern, Brandes

の研究參照）と表裏して、第三章「文化史の觀點から見た梵語からの借用語」(pp. 129—228) に扱う諸問題は、インドの影響を借用語に基ずいて認定し、文化史と言語研究との融合を示している。ヒンドゥー教は比較的に單一化された形でINにもたらされ、ジャワ等の固有の要素を入れて統合された傾向がある。現在バリでは、單一のヒンドゥー教 (agama hindu) を認めるに過ぎない。インドの神話（シヴァ系・ヴィシュヌ系）傳說（特にアガスティア仙關係）二大敍事詩等は、多數の神名・人名をINに傳えたが、時にはインドの神格を特殊化し (e. g. S Brahman : fire, cf. J *region. krama*, brama, p. 132)、固有の信仰と混淆し (e. g. S Bṛhaspati: Toba Batak Boraspati : lizard, p. 132—133)、インド名を用いて新たな崇拜の對象をつくり、或いは固有名詞を普通名詞化した (e. g. S Hanumat : B hanoman 'baboon' p. 142)。

來世觀・地獄・宇宙構造等の觀念も、單純化された形で傳わり、S借用語がこれに隨伴した。宗教（特に佛教、シヴァ教）、祭式、儀典（特にジャワ及びバリの葬禮、p. 149 sqq., 婚禮及びこれに關連する事項、p. 173—174)、社會制度等も、強くインドの影響を受け、その跡を多數の借用語に反映し、しかもその際起つた意義の變遷、適用範圍の移動は極めて興味が深い (e. g. B brahmana siwa 'a Śaiva brahman', b° toda 'a Buddhist b°', (b°) ulaka 'a not ordained b°' ＜S bālaka 'boy', p. 171—172)。

更に醫學（呪術と不可分）建築に關しては、インドに負うところが多く、高位の數詞、月及び週の名、抽象名詞を借用し、植物名・人名・地名で、Sにさかのぼるものも頗る多い。教養の低い者は、インドとジャワとを混同し、インドの古い英雄がジャワで生れ、その王朝の始祖となつたと信じている如く、インドの地理をもジャワに移した。從つて古來有名な地名が、そのまま或いは變形されてジャワの地名となつている例も少くない (e. g. Himagiri or Imagiri = Himālaya 'a hill near Djokjakarta', p. 217)。またSで說明し得る地名もある (e. g. Surabhaya (°baya) ＜S śūra 'hero' + bhaya, OJ 'fortification', p. 218; Jakarta ＜S jaya 'victory' + kṛtta, J karta 'prosperous etc.', p. 221—222, cf. 217)。これに反し、IN の重要な地名で、語原に疑問のある場合も多い (e. g. Malayu, p. 223—224, Sumatra : S samudra 'sea'? p. 224—225, Java : S yava 'barley'? むしろ ＜jawa 'Indonesian, indigenous'? p. 225—226)。

第四章は「借用語の外觀」(pp. 229—327) に關し、まずIN 語中のS要素の音形變化を詳說している。一般にバリの寫本は、ジャワの寫本よりも、原形を忠實に保存し、誤つた

形が後のジャワの傳承に踏襲された場合も多い。プラークリットの影響も考慮に入れなくてはならない。Sそのままの形とJ化或いは一般にIN語化した形とを、區別することが肝要であり、本章では後者のみが問題となる。借用語が受入れ語の音韻組織に同化されて、種々な變貌を生ずるのは當然である。著者が二十三項目に分けて說明している例證は、およそ借用に際して考え得る音形變化を網羅している。

形態論的に全く異るSとIN語との間には、借用に際しての語形に、注意すべき問題が起る。Sに最も普通なa語幹の名詞は、IN語においても概してa（或いはその轉化音）で終るが、これにも例外があり、他の語幹については更に複雜である。稀には格形のまま借用された例があり、同樣に動詞の人稱形が保持された場合もある（e. g. OJ āsītkāla 'in former times', OJ brawit 'word(s)' ＜S abravīt 'he said', p. 277—278）。借用に際しては、連想の作用が强く、單語相互の間に影響が起ることも少くない。言語學者の熟知する analogy, blending (contamination), metanalysis (false division, e. g. Eng. a nickname＜an ekename 'an additional name'), popular etymology, retrograde derivation (e. g. Eng. cherry＜OEng. chiris sg.) 等の現象は、しばしばSからの借用語に認められる。IN語が 'duplication' に富むことはよく知られているが、借用語もこの影響を免れない（e. g. Buginese kuma-kuma ＜S kuṅkuma 'saffron', sara-sara 'suffering, torment＜S saṁsāra, p. 291）。

Sで頻繁に用いられる接頭辭が借用されて、IN語固有の單語と複合した（e. g. OJ durlaga 'difficult to be fought against'＜S dur-(duṣ-)+J laga 'fight, combat', p. 293—294, OJ pragagah 'valiant, courageous'＜S pra-+J gagah 'spirited, stand firm', p. 297）。複合の自由はSの一大特徵であり、複合詞をそのまま借用した例は非常に多いが、元來この機能に乏しいIN語にあつて、二個以上のS要素からなる複合詞、または一個以上のIN語要素を含む複合詞的語句は、Sを模倣した結果であり、文學的乃至高尙な文體を飾るために作られたものと解される。この際借用要素の音形・意義の推移、語順のIN語化等が起つて、問題を複雜にすることも少くない。またIN語要素とS要素との結合は、'hybrid aggregation' と稱すべき、特殊の一群を形成する（e. g. J ambēk sura 'heroic'＜J a° 'character'+S śūra 'hero', p. 309）。結合される兩要素が同義語である場合も存する（e. g. M susah sĕṅsara 'uneasiness and misery', S saṁsāra, p. 311）。

同一のS單語が、數種の形で借用された場合、意義の範圍

を異にすることがある (e. g. M sĕrpa 'curse', 'blessing': sĕrapa(h) 'imprecation of evil'＜S śāpa 'curse, imprecation' p. 315)。これと反對に、異る二個のS單語が、借用語として同一音形に歸着した例もある (e. g. B iyukti 'properly, justly'＜S yukti: 'visible appearance, becoming evident'＜S vyakti, p. 319)。

借用語の研究にあたり、以上のことを考慮しつつも、その語原に關して諸種の疑問が殘るのはやむを得ない。すなわち、インド起原の公算は大きいが詳細の說明が困難な場合、S的外觀を呈しつつS語彙中に發見できない場合 (e. g. OJ prakośa 'powerful, solid, durable, etc.', p. 324)、IN語の單語で音形・意義がS單語に酷似する場合 (e. g. M dara 'maiden, virgin', cf. J lara＜OJ rara: S dāraḥ 'wife', p. 321)。

第五章「意義の變化」(pp. 328—385)。外形上の變貌とならんで、借用語はしばしば原義を離れて通用する。音形の變化はいくつかの項目に分類して、その原因を解明し得る場合が多いが、意義の變化には、作用する要素が複雜に錯綜し、殊に宗教・社會・政治・制度に關する語彙において、その困難が痛感される。意義の變化は文化史と密接に關連し、INの如く文化的に變動しつつある民族の言語にあつては、語彙の新陳代謝が活潑で、語義變遷の速度が早い。インドで聖典の一群を總括するに用いたS āgama (小乘佛教の阿含、シヴァ教の聖典參照) は、INにおいて一般に宗教的知識、更に宗教を意味するにいたり、宗教の傳播の歷史と歩調を合わせ、現在J及びM等で、agama Islam はイスラーム、agama Kristĕn はキリスト教を指している (p. 330)。

意義の變化は豫測を許さぬ方向へ進展するものであるが、借用語についても同樣である。極めて概括的な二傾向、すなわち意味の擴張と縮少、比喩的意味の普通化、抽象的意味の具體化等、いずれの言語にも見られる現象の例は甚だ多いが、INの慣習と關係の深いタブー (linguistic pĕmali) の問題は、特に注目に値する。明らさまに事物を名指すことを避けるため、更に廣くいつて 'euphemism' のために、Sからの借用語を利用した例が認められる (例えば「虎」J sumitra＜S do. 'a good friend', J bragalba＜S pragalbha 'bold', J sĕmbawa＜S saṁbhava 'ability', p. 364—365)。この際著しく原義から遠ざかることも珍しくない。

音形の變化におけると同樣、意義の變化に際しても、外觀の類似する借用語は、相互に影響しあうことがある (e. g. J padni 'the first consort'＜S patnī 'wife', *and* padmi 'do.'＜S Padmā 'Viṣṇu's consort' *or* S padminī 'a wo-

man of the first class', p. 370)。時には借用語の意味の分岐が、Sの原義から說明し得る場合があり (e. g. J kriḍa 'being engaged in cultivating, labour, amusing oneself (amorously)〈S krīḍā 'play, amusing, amorous sport', p. 375)、時にはインド起原を思わせつつSとの關連を見出すに困難な場合がある (e. g. OJ bhujaṅga, J bujaṅga, pujaṅga 'a learned man belonging to the clerical order': S bhujaṅga 'a court scholar': IN bujaṅ 'an adult but unmarried person', p. 371—375)。

日常語と異り、文學語及び上層語(J krama, krama inggil)においては、意義の變化にも特殊性が認められる。J及びM詩人やその模倣者は、好んで高尙な語句の使用をてらう傾向が強く、比喩的用法、婉曲語法、意味の特殊化等により、借用語の意義を飛躍的に變化させた (e. g. J *official krama* toya 'urine'〈S toya 'water', p. 385)。ただし外形の類似に惑わされて誤形を生んだ例もある (J ambrahmaga, ambrahmamarga〈S ambaramārga 'moving in the sky'; brahman とは關係が究なし。p. 383)。

第六章「梵語の影響に對するインドネシア語の反應」(pp. 386—427)。SとIN語とは、文法的に全く異るにもかかわらず、借用語は主要なIN語中に、決定的に滲透した。Sの語幹からIN的派生語をつくり (derivation)、固有の單語にS的外貌を添え (Sanskritization)、兩語の要素を接合し (e. g. M apabila, apakala 'when'〈apa 'what, how'+S vela, kāla 'time', p. 388)、少くもJはSの接續詞 (yadi, yady api) 及び前置詞 (e. g. saha) をも借用し、文法的複數の標識なきMは、借用語をこの目的に利用した (e. g. sĕgala(〈S sakala 'whole') rumah 'all) houses', p. 397)。Sの修辭法の詩文に對する影響は顯著で、インド詩人の愛好する śleṣa'(一語二義の單語の結合)は、ジャワの詩人によつて模倣された。しかし簡單な修辭法乃至地口の類は、いかなる文學にも自發的に用いられるから、Sの影響の限界を斷定することは容易でない。またいわゆる 'loan-translation' (e. g. OJ ikur asu *lit.* 'tail dog'=S śvapuccha 'name of a plant', p. 402) のほか、'hybrid translation' の例もある (e. g. OJ nusantara〈J nusa 'island'+S antara 'other'=S dvīpāntara 'Archipel indien et les pays voisins' S. Lévi, i. e. Indonesia and Southern Indo-China, 崑崙參照、p. 403—404)。

Sの影響はIN語全域に及んでいるが、文學的借用語は民衆の間に滲透せず、一般民衆の語彙に入つたものは、比較的に少い。文學語と普通語との間で、同一借用語の形が異なり、

一種の‘doublet’を生じた場合もある。例えば、S agni ‘fire’はそのままOJに入り、その後の文學作品にも用いられたが、現代の普通語としては、gĕni＜agĕni となつている（p. 405）。J文學の影響は非常に強く、これを通じてM文學語に入つたS單語は多く、スンダ語に詩的單語として採用されたものも若干ある。文化の變動と語彙の隆替とは互に關連し、Sからの借用語が廢語となつて、イスラーム系の單語がこれに代る等、複雑な條件に左右される。借用語と固有語との生存競走並びにその存廢の原因を究明することは、將來の重要な一課題である。起原は比較的に新しいとしても、Jの單語に、對象または會話者相互の身分關係に基ずく尊卑の等級のあるのは周知の事實である。借用語は krama inggil（支配者に對しまたはこれにつき用いる語種。）krama（目上の者に對し用いる語種）に入つたばかりでなく、ngoko（目下の者に對し、また一般民衆相互に用いる普通語種）にも若干入つている（e. g. *ngoko* gĕni ‘fire’＜S agni: *krama* latu; *ng.* rupa ‘outward appearance’＜S rūpa ‘form’: *kr.* wĕrni＜warna, *kr. ing.* warna＜S varṇa ‘colour’, p.411）。借用語が普通語に入つて固有語に代りまたはこれを驅逐した例は、文化史の見地から注目に値する（e. g. Orig. IN la'ud ‘sea, the open sea’, cf. M, Toba Batak laut ‘sea’, Tagalog laot, etc., OJ lod: *ng.* sĕgara＜S sāgara, *kr.* sĕgantĕn＜sĕg. ara, p. 415）。

十九世紀の後半以來、INには盛んにヨーロッパ文明が移植され、特に最近はMを基礎とするBahasa Indonesiaが發達し、國際的單語が著しく增加した。M及びJの最近數十年間における新語の借用は、數えるにいとまがない。しかし文筆家・新聞記者等が、試驗的に使用したに過ぎず、教養ある社會または專門家の間にのみ用いられて、一般に普及しないものも多い。かかる新語には、固有の要素とアラビア語、オランダ語、ポルトガル語等の要素との接合によるもの、ギリシャ語風またはラテン語風を裝うもの、いわゆる‘loan-translation’によるもの等が含まれ、しばしば奇妙な外觀を呈し、長く使用に適しないものが少くない。著者によれば、この際適度にS借用語を復活することも一考に値する。ヴィシュヌの乘物ガルダ鳥王の名を利用したGaruḍa airwaysの如き新造語の例はすでにある（p. 422）。

以上で本論は終り、附錄一（pp. 428—430）は、S文献に用例がなく、またはSのコーシャ（辭書）にのみ見いだされる單語で、IN語に傳わつているものを擧げ、S語彙の研究に有益な資料を提供する。インド起原が疑わしく、或いは‘Sanskrit made in IN’と稱すべき奇異な例も含まれている。

附錄二(pp. 431—434)は、IN語を媒介として西洋に傳わつたS單語を擧げている。Mの仲介によるものも少くないが、オランダ語へはJを通じて入つた場合が多い。この際オランダ語において、借用の場合に起るのを常とする變遷を、再び繰返した例も發見される。最も興味のある借用語の例は Dutch (*lower colloquial*) tabé で、結局 S kṣantavya 'to be forgiven' (: OJ ksantawya, santawya, santabya, *younger* saṅtabe, *abbrev.* tabe, cf. Engl. excuse me) に含まれる接尾辭 tavya に由來する (p. 432—433)。

(東京大學教授)